

愛と死の別れ

野の花にかよう夫婦の手紙

村島

つるつるつるつるつるつる

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りください。なお、このほか、カッパ・ブックスではどんな本を読まれたのでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九
光文社

神吉晴夫

愛と死の別れ 野の花にかよう夫婦の手紙

昭和39年4月1日 初版発行

検印廃止 ￥240

著者 村上 島 帰し づ 之 彦

神奈川県茅ヶ崎市小和田7105

発行者 神吉晴夫

印刷者 堀内文治郎

東京都千代田区神田三崎町2

堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

(関川製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Yoriyuki Murasima 1964
Sizue

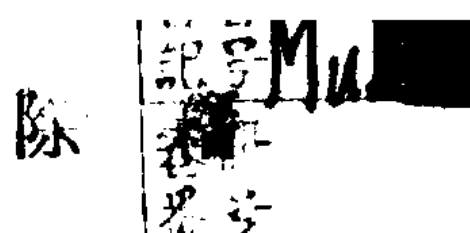
愛と死の別れ

野の花にかよう夫婦の手紙

村島しづる之著
むらしま しづる ゆき



カッパ・ブックス



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

まえがき

妻の親友が語られるところでは、妻は「わたしはやはり他のだれよりも村島の妻となるのが一番のしあわせだったのです。」ともらしたという。また未婚の大学生と古典文学や仏教美術などを討論して、「わたしは村島へといひできて、いろいろと教養を身につけました。信頼のできる人を夫にもつことが、なにより妻のしあわせですわ。」と訓戒くんかいしたこともあるという。

結婚四十年、かんしゃくもたてたし、どなりもしたが、妻は内心わたしをこよなく愛していたのだと思う。ちょうど、わたしが内心妻なくしては片時かたときも居れない存在だったように――。

妻が癌がんとなって、わたしのかんしゃくもやまって、内側の愛情があらわに出て、毎日手紙を書かずにおれなくなった。妻も同じだった。この書は、妻が癌で病院にいるあいだ、二人が相手の面影おもかげをしのびつつ、毎日心たのしく書いた九カ月にわたる約五百通のラブレターの定期便の中から編集者が抜粋ばうすいしたものである。もちろんラブレターの模範もはんにはならぬにしても、いつわらぬ夫婦愛の流露りゅうろうとして読み流していただけたら、いささかの恥じらいをもって本書を刊行した著者も

赤面せずにすむ。

この本が世に出るにあたっては、光文社の出版局のかたがたにお世話になったことを感謝します。

一九六四年二月一日

茅ヶ崎の病床にて

村島 帰之
むらしま より ゆき

目次

まえがき……………三

プロローグ——生と死のあいだ……………七

一 愛の讃歌……………一三

二 生きるのぞみ……………八九

三 しのびよる死の影……………一二三

*

鎮魂歌——妻よ、やすらかに眠れ……………二二



「ユリ」村島しづゑ画

プロローグ——生と死のあいだ

〔妻から夫へ〕

七月十二日。

きのうまで、あなた専用の看護婦だったわたしが、急におそばからいなくなって、どんなにあなたはお寂しいことでしょう。でも、いつもあなたがおっしゃるとおり、生命のことは神様に、病気のことは小川先生（おがわ 婦之の主治医）と本職の看護婦さんに、家のことは真理子（まり 娘）らに任せて、心安らかにご養生ください。そして、わたしの手術が無事にすむように祈っていてください。

ここはきのうまでの松林の中の一軒家と違って群居（ぐんきよ）ですから、チョッピリとまどっています。

夜、眠ろうとしても、ひと晩じゅうシャッキリで苦しんでいる患者さん。夜になると咳（せ）きつづける患者さん。あっちこっちからの病人のいびき。隣（となり）病棟（びやうどう）の赤ちゃんの泣き声。看護婦さんの足音と話し声。看護婦さんと呼ぶ患者さんのブザーの鳴りひびく音。それらがみんな眠りをさまたげます。

ことに、鳴りひびくブザーは、あなたがわたしを起こしていらっしやるのかと胸がさわぎ、シヤックリの息苦しさ、咳きこみのはげしさは、あなたのあのときの苦しみをまざまざと思わせ、心はすこしも休まりません。

潮騒しおさいのかわりに――。松風のささやきのかわりに。

でも、午後八時半、ほととぎすの声をききました。耳を澄ませて、三声聞きとりました。まぎれもなく、子どものときから聞きなれたあのほととぎすの声を！

御苑ぎえんの森へ鳴き渡る途中でしたかしら、それとも、御苑からどこかへ鳴き渡る道すがらでしうか。旅の途中、なつかしい声を聞かせてくれた小鳥に「ありがとう。」と声に出したら涙がこぼれました。

君が家にわが住み坂の家路をも

われは忘れじいのち死なずば

かきのもとのひとまる
(柿本人麻呂夫人)

七月十三日。

「東京の空はほんとうの空ではない……。」

〔智恵子は東京に空が無いといふ、ほんとの空が見たいといふ。……阿多羅山の山の上に毎日出てゐる青い空が智恵子のほんとの空だといふ。……〕「智恵子抄」高村

光太郎著より

だれかがそう言いましたね。でも、鋭角に切られた、たった二尺のこの病室の窓の空にも、にぶ銀の昼の光はみなぎり、残照は長くたゆたっています。

その空を、日にいくたび、小鳥がかすめるでしょう。阿多多羅山の上の空でなくても、この大空をつくりたまいし父なる神のめぐみを、しみじみとありがたく感じとることができます。まことに、大空は神の栄光とその聖手の業をあらわしております。

「茅ヶ崎に夫が寝ねますわれはここに
健やけき日のはるかなるかも」

七月十四日。

ゆうべ、睡眠薬をいただいてから、脱脂綿で耳に栓棒をして寝ましたところ、はじめてよく眠れました。

あなたが、わたしの癌宣告のショックで重態に陥った六月二十二日午前一時から、ちょうど三週間ぶりです。もう大丈夫。眠れば、体力も回復して、手術も順調に、早くなおって帰れますよ。祈って、待っててくださいね。

あなたの、重態の予後と、わたしの手術の予後と、どちらが早いでしょうか、競争です。

七月十五日。

ゆうべは、やっぱりだめでした。重態のあなたをおいてきて、どうして安穩あんのんに眠れるでしょう。睡眠薬も、脱脂綿の栓棒も、効力はたったひと晩。

あなたも、きつと眠れないでいらっしゃるでしょう。昼まのあいだはよく寝るあなた、夜はやっぱり眠れないで、ここの人たちのように苦しんでいらっしゃるとしたら……。

ああ、神様！　どうか安らかな眠りを、はなれて病やんでいるあなたに豊かにたまえ。

“かかる日を恐れ来にけり健康の

衰え果ててせんすべ知らず”

〔夫から妻へ〕

七月十七日。

手術ももうすぐだね。びっこひいてもいい。（わたしも手足のきかないダルマサンだからね。）
どんなにかたわになってもかまわないよ。丈夫になって「おまえの」家に帰ってきてくれ。それを祈っている。ハダカで表おもてを歩くわけではない。多少の奇形は問題じゃない。

おたがい、病気で苦勞するね。しかし、くよくよするなかれ。ガンバレ。神様がついていなさる。

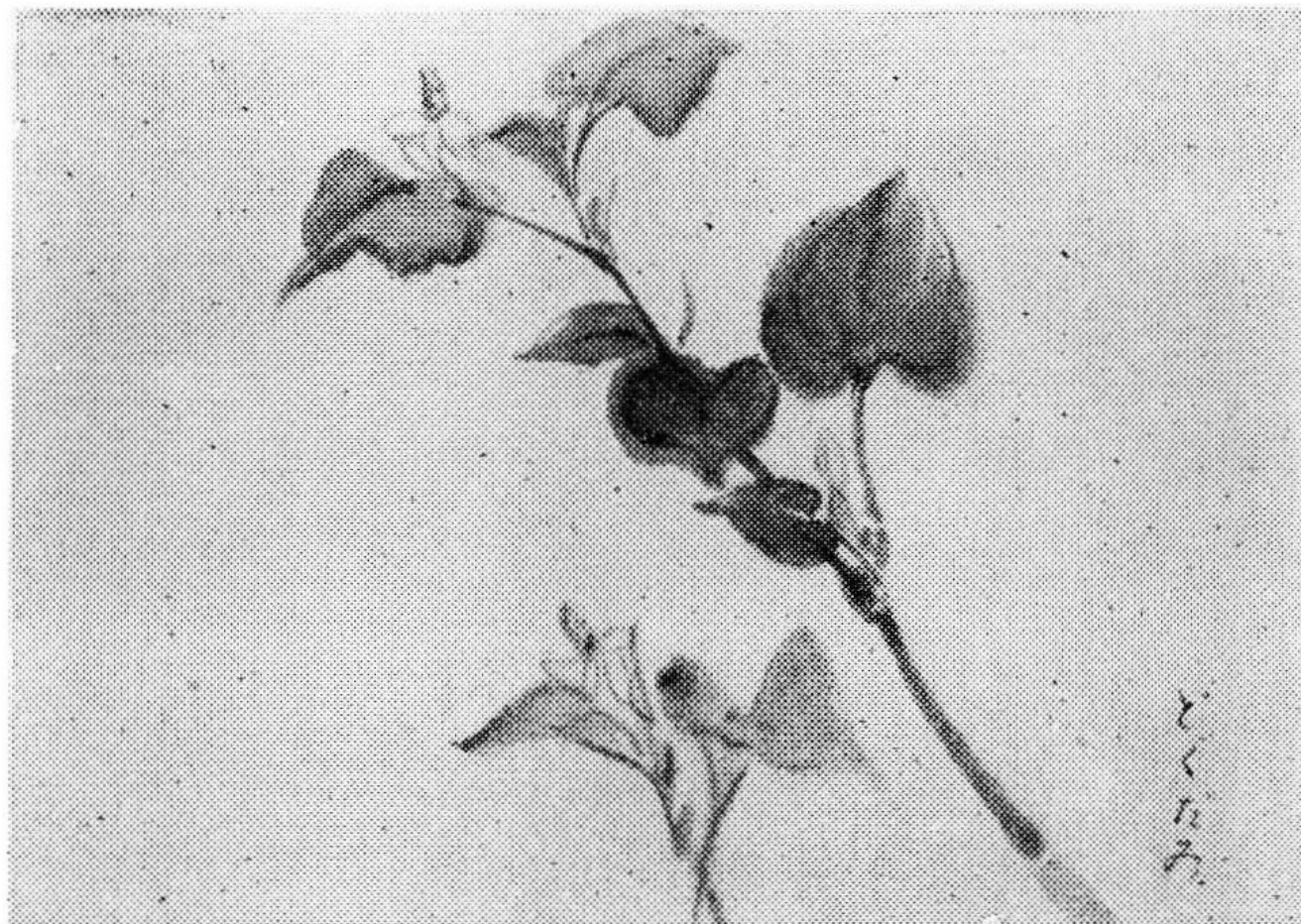
風を送ってやりたい。風鈴ふうりんが風にゆれてるのを見て過すごしている。こんどおまえが帰ったら、生活設計や行動半径（二人の）を思いきって縮小しよう。

しづゑ、横尻しりになっても片肺とではアイコだ。ゆっくり療養して早く帰ってくれ、待っている。こっちは順調。平林さんひらばやし（婦之の看護婦）もよくやってくれるので、不自由まったくなし。

風が涼しい。千羽鶴や風鈴を生徒がくれた。

一
愛
の
讃^{さん}
歌^か

『とくだみ』村島しづる画



“朝に夕に祈りてあれば君が身は

遠くありとも近きがごとし”

村島しづゑ

四十年めの別離^{べつり}

村島 帰之

からだの異状

よき妻であった。年^{とし}六十三、直腸癌^{がん}にさえかからなければ、まだまだ元気で、病床にあるわたしの看護もいままでどおりしてくれたであろうに。わたしにとっては、かけがえのない、おいしい妻を失った。

わたしとは違って、妻はほとんどこれという病気をしたことがなかった。それが、近年になってから、「だるい。」といい、「朝はなかなか起きられない。」といい、「小水が近い。」などと訴えるようになっていたが、わたしたちは、「老化現象だろう。」とかたづけていた。

ところが昭和三十六年あたりから、だんだん尿意^{にようい}がひんぱんとなり、そのうえ、トイレへ行っても、すこししか出ない。便意も同様である。わたしたちはやはり、「老化現象」一点ばりでか